盧溝橋

中国・北京

中国・2003年発行

盧溝橋は北京の中心部から西南方面へ15kmほど離れた永定河に架かる石造アーチ橋で、王朝時代の橋としては北京では最長の橋です。南北朝時代、金が今の北京に都をおいた頃から渡河施設の需要が高まり、本格的な橋の建設が企画され、1192年に完成しました。

永定河は暴れ川で、古くは黒い水の流れを意味する盧溝河などと呼ばれており、それが橋名となりました。

1270年代に元の首都、大都（北京）へやってきたマルコ・ポーロは、後に『東方見聞録』の中で盧溝橋を称え、詳しく紹介しています。このため西欧では「マルコ・ポーロ・ブリッジ」とも呼ばれるようになりました。

橋の全長は266.5m、橋体部の幅は7.5m、11のかなり扁平なアーチが連ねられ、最大スパンはおよそ13.5mです。アーチの中心部では輪石が、縦方向に目地が連ならないように積まれています。そして、盧溝橋には「斬竜剣」が備わっているという伝説があります。ある日、洪水とともに10匹の悪竜が橋を襲いました。ところが竜が橋の下に入ったとたん姿を消し、逆巻く水も静かにアーチをくぐっていきました。この伝説が生まれた根拠は橋脚の周到な構造にあります。橋脚は船形に造られていて、上流側には三角形の水切りが設けられ、さらにその先端に鉄柱が埋め込まれ、水切りの上には厚い石積みが載せられています。これによって洪水や氷塊の衝撃を受け止め、分散するようになっているのです。

創建以来、820年の間にはこの橋を巡る戦いが何度もありました。近いところでは、1937年７月、橋の袂での軍事衝突をきっかけに日中戦争が始まりました。

盧溝橋は多数の石獅子の彫刻で飾られています。特に石造りの高欄を支える両側281本の石柱の上には表情豊かな雌雄や子供の獅子像が載せられています。その総数は500頭にもなるようです。

堅固な造りを持ち、多くの彫刻で飾られたこの石橋は多くの人々の賞賛を受け、詩や絵の題材になりました。

橋には何度も修復、改築の手が加えられてきましたが、1987年の修復ではできる限り古い姿に戻され、現在は国の重要文化財として大切に保護されています。

撮影：松村　博